

## 三藩市唐人街の社会構造（六）

—— 広肇帮の典型 ——

内 田 直 作

### 二 政治的結社としての致公堂

(イ) 堂会の政治的役割 Ⅱ 上述するところにおいて、アメリカ各都市の唐人街の成立した秘密結社組織としての堂会が、反社会的な賭博・阿片・脅迫・密入国等の不正諸事業の経営に墮し、勢力範囲争いの堂斗を繰り返していたことを明らかにした。だが、堂会のうちでも致公堂のごときは辛亥革命に際して、政治的に顕著な役割を果たしていたことをみすごされてはならない。

アメリカの堂会のみならず、本国から海外の東南アジア地域に成立をみていた洪門系の秘密結社、その他本国の長江流域における「哥老会」、華北における「白蓮会」のごとき秘密結社の何れもは反官的・排外的、ひいて

### 三藩市唐人街の社会構造 (六)

は諸革命運動においても常に有力に参加していた。本国であれ、海外であれ、中国人社会に普遍的存在とさえなっている秘密結社組織にふれないでは、中国の政治的諸問題の実体は十分に理解しえないといって差支えない。

洪門系の天地会・三合会・三点会等の秘密結社が、その成立の起源が清初の康熙年間(一六六二—一七二二)か、乾隆年間(一七三六—一七九五)か、<sup>(1)</sup>康熙十三年(一六七四)か、康熙五十三年(一七一四)<sup>(2)</sup>か、諸説紛々として明確にされたいが、何れにもせよ少林寺焚焼による成立動機からして、反清復明を意図する政治的密結社であったことはいうまでもない。

宗教儀式は民間信仰としての仏教・道教の混成宗教 ≪ Syncretism 〉の形式を採用しているが、祭神が少林寺焚焼後、反清運動に倒れた前・後五祖と、三国時期漢室再興をはかった桃園結義の英雄の関帝であることからして、反官的、革命的組織としての骨格を保持している。

だが、現実的にはそれらの秘密結社が反社会的諸事業を經營する人的多数集団企業に墮していることは前述した通りである。そのことはアメリカにおける堂会のみにとどまらないで、本国や、東南アジアの秘密結社にも共通していた。たとえば、太平天国の乱の討伐軍隊の復員解散後、失業軍人達が組織していったといわれる揚子江流域の湖南省から四川省方面を勢力範囲としていた「哥老会」 ≪ Ko Lao Hui, Brothers' Society 〉についてみると、その経常的収入は阿片窟・賭博・妓館・武器・ガソリン等の禁制品取引と、米穀その他の市場卸売取引に課している税徴収等であった。さらに、哥老会自体以外の会員經營の阿片窟からも一定の収入を確保していた。また、哥老会の流れを汲むといわれる揚子江下流域の輸送業者集団の青帮(またの名、安慶帮・清帮)や、太平天国の乱を平定した曾国藩の湘勇(湖南の義勇兵)の解散にともない土匪化した集団の紅帮とも同様、組織的に内河交

通の要衝で旅人・商人達からの出捐を強制していた。<sup>8)</sup>

同様のことは、東南アジアにおけるボルネオのポンチアナにおける金鉦区けんせんくの蘭芳公司らんほうこうし（大唐総長・羅芳伯）、マラヤの錫鉦区における義興公司ぎきんこうし、海山公司かいざんこうし（頭家、葉阿石）、葉氏公司えつぎんこうし（甲必丹、葉阿來）等の場合にも共通していた。賭館・妓館・煙館の経営、酒税・質税の收税請負しゅうせいきんぬいからして、鉦山苦力労働者達からその血汗を収奪して、これらの広帮系の頭家達づたい＝Tawakals は雄厚な公司資本を形成していた。ペナンの福建帮の苦力頭の邱天徳しゅうてんとくの場合についてもかわるところがなかった。

右のごとく共通して反社会的諸事業を経営しながらも、その内部組織には下層労働者・失業者達、ひいては商人層相互間の家族的父子兄弟としての擬制的家族関係と、徹底した相互扶助制が採用されている。避難者に対しては相互の符牒きいで仲間であることを確かめて救済する。前仇旧恨には復讐し、旅費のない場合は帮助し、寄銀は誤りなく保管する。兄弟の財物を私し、その貨物を不当強買してはならず、官訟には必要な援助を与え、賭博場では兄弟の錢財を詐取してはならない。土農工商各々一芸をもって洪門に入れば忠心義氣を先とし、同一身体の手足のごとくにして彼此差別してはならない。後日起義のときは軍火糧草を支弁して反清復明に協力し、五祖火燒の仇に報いる。もし、洪門の結義に背くときは万刀のもとに生命を賭さなければならぬ等、天地会の場合については、その三十六誓・二十一則・十禁・十戒によりきびしく律せられている。<sup>4)</sup>

有力な姓氏団体を結成しえなかった弱姓の血縁関係のない下層労働者達が、家族制度に擬した仲間道徳をもって、豪俠義氣の徒を「香主」、もしくは「堂頭」として秘密結社、いわゆる「会党」が各地に江湖を天下一家として成立をみていた。反社会的諸事業を経営しながらも、内部的には相互扶助団体として同姓の自然村落、もし

くは姓氏団体と同様な仲間的兄弟關係が支配していた。

根岸侖博士が中国の商事組合「合股」を論ぜられるに際して、「合股の人的關係の淵源をきわめないでこれを單純な商事組合としてしまうのは誤りである。合股は家族制度を移したものであって、血縁のないものが家族にならうて組合、すなわち社をつくるのと異なることがないのである。社には家族道德に擬した仲間道德なるもの行われるごとく、合股にもまたこれを同じく商人道德なるもの行われる。合股には協同体社会性ありといつて差支えない。」<sup>(5)</sup>と説明されていることは、これらの反社会的事業団体としての秘密結社についても妥当するといえよう。ただ、大清律例で「会党」として非合法的に取扱われていたこれらの秘密結社が、反清復明の革命的企圖を内包し、容易に政治的団体として変質化し、發展する可能性を内包している点において、事情は大いに相違する。それだけに、マラヤでも、一八八二年に危険社団条例 *Dangerous Societies Ordinance* を公布し、一八九〇年には洪門系諸団体は公共秩序への脅威であるとして解散を要求された。<sup>(6)</sup>

秘密結社としての堂会や、公司には二元主義が支配している。反社会的事業經營による不正収入も、内部的仲間の救済、共通地盤にたつ仲間組織への救援、反官的、排外的、革命的起義に際しては一切の資金と力量をあげてたちあがるための必要悪として肯定され、不正と正、对内道德と对外道德の背反の両立をみている。安良堂の堂頭の司徒美堂 *Seto Mei-tang* (広東省開平県人、1806—1906) も、平素はアメリカ人から「吝嗇鬼」と名づけられていても、起義や危機に際して一挙に巨款の支出も圧わないことを述べている。<sup>(7)</sup> 堂会資本家固有の企業家精神ともいえよう。

このような態度からして、堂会や公司が、光棍(無頼漢)の集団でありながらも、清末から現在にいたるまで

政治的に多彩、かつ有力に登場してくる。その著例としては、洪秀全（嘉応州花県人、客家）の太平天国の乱、（一八五〇—一八六四）、いわゆる「長毛造反」に際して、清史稿には上帝会のまたの名は三点会（三合会）として、上海の小刀会（天地会、洪門系の一支流）が広東人の劉麗川を首領として、上海の埠頭工人・塩民・漁民・破産農民を領導して上海県城を占拠し、一七カ月にもわたって、太平天国に呼応している。<sup>(6)</sup>

ボルネオのマンドールに蘭芳大総制共和国（一七七七—一八八〇）を成立せしめていた蘭芳公司の大唐総長の羅芳伯（広東省嘉応州梅県、客家）も、三点会の老大哥であった。<sup>(7)</sup> サラワクでは太平天国の乱から避難してきた天地会党の義興公司在、一八五七年イギリス側の支配者ゼームス・ブルック—James Brooke から一時政権を奪取した事件があった。<sup>(8)</sup>

イギリスが一九世紀後半の不干渉政策—Non Intervention Policy を一擲して、マラヤの奥地を植民地とするにいたらしめた。ラ州の錫鉱区をめぐる械斗（一八六二—一八七四）を展開した義興・海山の両公司も洪門系の三点会であった。<sup>(9)</sup> 一九〇〇年の義和団事件における扶清滅洋の拳匪も白蓮会系の会党であった。<sup>(10)</sup> さらに、辛亥革命（一九一一・一〇・一〇）に際しては、揚子江流域の哥老会や、華南の三合会のほかに、アメリカにおける洪門系致公堂が有力に参画していたことについては以下に詳説する。その後、一九二七年四月一二日蔣介石の北伐軍に呼応した上海の青帮（哥老会支派）の杜月笙・張鏡湖・黄金榮達の組織した「共進会」による中国共産党員の肅清、ついで一二八事変、七七全面抗日戦における便衣隊、游撃隊組織による抗敵にも共進会は顕著な役割を果たしていた。<sup>(11)</sup> 上例にも明らかにされるように、洪門系会党、その他の秘密結社は対外的に反社会的とみられる場合

### 三藩市唐人街の社会構造(内)

もあるが、対内的には相互扶助団体であり、また政治的結社として変質する可能性を多分に内包していた。

孫文は「中国人はすべて貧であって、貧富の均しくないのは、大貧と小貧の差にすぎない、大資本家も外国の資本家に比較すれば、小貧にしかすぎない。」と述べていることく、大貧の下層の農民・労働者層を主体とし、せいぜい小貧の商人層をもふくめて結成される秘密結社、もしくは会党は清末の反清復明、辛亥革命の前後から一九一九年の五四運動後の共産主義運動を通じて、中国政治運動の三大潮流、すなわち「国民党」と「中国共産党」とならんで、「会党」は両者の前駆的存在としてきわだった影響力を保持していた。

アメリカの諸堂会のうち、右の顕著な例は「致公堂」の場合であった。致公堂はその他の堂会と同じく、設立の当初は反社会的諸事業の経営に終始していたとみられるが、本世紀初頭の国民革命運動に際して、政治的結社として辛亥革命の成功に大きな影響を与えた。さらに、戦後中共革命の成立をみた後においても、安良堂の領袖司徒美堂によって「致公堂」は「致公党」に改組されて、今日では中華人民共和国政府に参与する「各民主党派」のうちに参加している。

以下、サンフランシスコの唐人街のかつての堂斗のくりかえされたスポットフォード裏町＝Spofford Alley に本部をおく「致公堂」が、清末から中共革命実現にいたるまで展開したその多彩な政治的側面の活動について概観しよう。

致公堂と孫文Ⅱ先に中国人社会に血縁・地縁の自然的結合関係の支配すること以外に、地方的な特性をもつ豪俠義気の秘密会党が各地に遍在し、政治的団体としても機能することを明らかにした。中国革命の元勳の孫文

(広東省香山(現名、中山)県翠亨村人、字、逸仙、号、中山、日本名、中山樵、1866—1925)もまた辛亥革命(一九一一)におよぶ民族主義運動の実践において、血縁・地縁関係と会党のごとき右のような中国人社会の伝統主義的凝集力に制約されることを余儀なくされていた。

孫文の父「道川」は客家=Hakkas, or Kikesであったが、母の楊氏は纏足をしていたと伝えられるから、客家出身でなく、本地=Puntisであったと推測される。「客家」の別名が「山地」といわれる通り、孫文は跣足で山地に働く農夫の子であった。<sup>66)</sup>

郷土で展開された英清間阿片戦争(一八三九—一八四二)、洪秀全(客家、広東省嘉応州花県人、1813—1864)の太平天国の乱(一八五〇—一八六四)、客家と本地との間の械斗の西路事件(一八五二—一八六七)等の動乱直後に育っただけに、早くから民族意識や土地改革の気風の洗礼をうけていた。

彼が致公堂と中国革命同盟会の綱領、さらに三民主義のうちの民生主義に「耕者有其田」のスローガンのもとに、地権平均の土地改革思想をとり入れたのも、ロシア共産党の戦術を受け入れたという解釈よりは、郷里における山地に居住する後来の「客家」が耕地をめぐる、先住の「本地」との間にはてしない械斗をくりかえしていた「山地」としての立場を反映するものと解釈した方が妥当であろう。

嘉応州客家出身の洪秀全の太平天国の「天朝田畝制度」において、土地の均分による封建的土地制度改革方式の打ちだされていたのも、同様な客家の立場によるものといって差支えない。太平天国の乱が本地との対立のほげしい広東省をさけて、広西省から北上して湖南省で多数の追隨者を獲得し、動乱の拡大をみたことは、後年孫文の「耕者有其田」のスローガンが湖南省出身の毛沢東の農業革命方式に踏襲され、湖南省の農民運動を起点と

して、その後の毛沢東路線の発展をみていったコースとも、両者に多少の共通点のみいだされる。「天下の事に任ぜんと欲すれば、必ず本郷より起る。」との寧波財閥領袖の虞洽卿が述べたごとく、中国における諸革命の発想も、常に各指導者の郷土の事情に大きく左右されていた。

孫文の二人の叔父達は翠享村からの、最初のカリフォルニア移民の一行としてでかけ、つづいて孫文より十五才年長の兄孫眉(字、徳彰、号、寿屏)は早くからハワイに渡航し、マウイ島に約一、〇〇〇エーカーの山地をもち、種植牧畜に従事し、積資数万に達していた。孫文が十四才の一八七九年に帰郷した際、ただ一人の弟としての孫文は母とともに、兄のあとを追って澳門<sup>マカオ</sup>を出帆した。ハワイでは三年間国教派のイオラニ学校=Iolani Collegeに就学した。

中山県(旧名、香山県)からの出身者達は一九世紀初頭から白檀香の産地としての檀香山<sup>ハバワイ</sup>に進出し、孫文の渡航した頃は蔗糖業の華工は一二、〇〇〇人に増加し、かつハワイの華僑人口比(一八八四年度、二二・二%)も最高位にあった。<sup>(80)</sup> 本稿(一)、第二節に既述の通り今日のハワイ華僑(一九六〇年度、三八、一九七人)の約七割は中山県出身者であるといわれている。

ハワイにおける三大華僑団体は、中山同郷会(一九五〇年設立)、四邑会館(一八九七年設立)、崇正会(旧名人和会館、客家系、一九二五年設立)であって、そのうち最大規模のものは中山同郷会である。中山同郷会の下部団体には、隆都從善堂(中山県第二区、一八九一年設立)、良都會館(中山第一区)、得都會館(中山県得都)、四大都會館(中山県四都および大都)、恭常都會館(中山県第六・七区)、その他「谷都三郷同郷会」、「翠享同郷会」等があつて、いづれも中山同郷会に先だつて成立をみていた。サンフランシスコでも中山県出身者達は「陽和會館」を組織し



て、既述の通り七公司のうち「寧陽會館（台山県出身）」「肇慶會館」（肇慶府出身）について、中位を占めている。

（本誌第二二号所載、本稿（二）、第一〇五頁）。

孫文にとっては当時のハワイは、血縁・地縁の関係から観察しても、まさにホームグラウンドにひとしいものがあった。一八八三年帰国後から辛亥革命（一九一一）にいたるまで、一八八四年・一八九四年・一八九六年・一九〇三年・一九一〇年と五たびも歴訪していることが首肯される。孫文の辛亥革命における指導力は主としてアメリカ華僑の資金的援助に負うものであったが、それはハワイを起点としてであったといっても差支えない。

一八八三年帰国後、翌一八八四年に香港のクウィーンズ・カレッジに入学、ついで一八八六年に広州の広済医学校、一八八七年には香港医学校（Hong Kong Medical School）に入学、同校に五カ年在学後医学博士の資格を獲得して、澳門で開業した。この広州・香港・澳門時代において、その交友の多くは会党分子であった。一八八五年の越南新約により、安南がフランスの保護領に帰するとともに、民族意識をつよめていった。広済医学校在学中の交友に、三合会員で豪侠の青年鄭士良（字、弼臣）がおり、一八九二年におよんで、鄭士良等の三合会勢力を背景に、漸進的平和手段で専制政治から立憲政体への政治的改革実現を綱領とする新会党としての「興中会」を結成した。<sup>21)</sup>

孫文の政治的活動はこの段階では、上層の士大夫官僚層よりも、専ら中国民間下層社会の血縁・地縁・会党の伝統主義的基盤の上に推進されていた。一八九四年日清戦争の勃発とともに、好機到来として、再びハワイの兄徳彰のもとに赴いて、倒滿興漢の会党としての「興中会」を設立した。ただ、興中会結成の際の「興中会宣言」<sup>22)</sup>をみても、国内、国外の中国人と連絡して中華を振興することを目標とすることが明らかにされている程度であ

って、全面的な倒満興漢運動にまでには発展をみていなかった。だが、当時ではマウイ島の一大畜牧家となり、千数百エーカーの牧場を所有していた兄の徳彰と、同志の鄧松盛(字、三伯、号、蔭南)とが私財をなげうって参加したが、その他の交友数十人の賛同を漸くえたのみであった。翌一八九五年帰国後、日清戦争の敗退の機を利用して、鄧蔭南等とハワイ資金によって、第一次の地方的造反の「広州の役」を起さんとして事前に失敗した。一八九六年孫文は広州の役失敗後、第三回目のハワイ渡航を試みて、興中会の推广を計画したが、十分の成功を収めることができなかった。

一九〇〇年義和団事件後、第二次の「惠州の役」にも失敗した。孫文をして「華僑為革命之母」といわしめたほどの海外の中国人の協力を確保することをえせしめたのは、彼が海外の洪門系秘密結社の「会党」に属する「致公堂」に加盟してからのことであった。

一九〇三年日本を経由してハワイを訪れ、遠縁の程蔚南等の援助をえて、「隆記報」を党報として、康有為・梁啓超等の組織する保皇党機関紙の「新中国報」と中国革命をめぐる論戦を開始した。同時に、同志勢力拡大の意図のもとに、同年冬洪門系の「檀香山致公堂」に加入した。拝盟するもの六十余人で、洪門団体の国安会館(一八六九年創立、旧名、同興公所、同興公司、一八九九年現在名に改称、戦後には、洪門致公党駐檀支部と改称)で加盟の礼節が挙行され、孫文は鐘国柱を保証人として「洪棍」(別称、元師)の地位が与えられた。<sup>23</sup>同年ホノルルで倒満のための「中華革命軍」創設の際の加盟の誓詞には「連盟人某省某某其人某某は韃虜を駆除し、中華を恢復し、民国を建立し、地権を平均せん。もし忒心あらば、神明も鑒察せよ。」と洪門系のスローガンの反清復明(駆除韃虜)と土地改革(地権平均)の方針が明確にされていた。<sup>24</sup>それとともに、興中会の新会員として加盟を要

求するものが絡繹あとを絶たない有様となった。ここでは、会党の致公堂への参加が大きな効果をあげ、康梁の「擁護滿清」の保皇党に大きな打撃を与えた。ついで、翌一九〇四年春孫文はアメリカ華僑への工作のため、サンフランシスコに到着したとき、移民局に入国を阻止されたが、致公堂の組織網によりサンフランシスコ致公堂大僚の黄三徳が斡旋にのりだして入国が許可された。<sup>28</sup>その後、在米の各致公堂から同志的待遇をうけることとなった。アメリカ華僑の七―八割が洪門系致公堂員であったといわれ、始めて孫文の国民革命運動は伝統主義的社會基盤の上に円滑に軌道にのっていった。

致公堂の政治的協力 吳尚鷹はアメリカにおける最初の堂会として、サンフランシスコに一八五二年広徳堂、一八五四年には協意堂との両家があり、何れも賭娯專營の機関で、械斗に際しては武器として斧頭を用いるため斧頭仔堂と俗称されたと述べている。<sup>29</sup>他方、マックレオドはカ州で六公司以外の最初の堂会は致公堂 〓 Chae Kung Tong (英文名=Chinese Free Masons) であつたとして<sup>30</sup>いるが、その創立年度については明らかにされていない。アメリカ安良堂の首領司徒美堂が一八八〇年一四才のとき、一介の苦力労働者としてアメリカに入国した後、一八八三年一七才のときに反清の洪門の組織する致公堂に加入した<sup>31</sup>といわれるから、その当時以前はかなり早くから致公堂の成立をみていたものとみられる。

致公堂がその設立の当初から本世紀に入って後最近にいたるまでのそれのごとく、純然たる政治的団体であつたかについては疑わしい。もちろん、マックレオドの記述によれば、致公堂は弱姓の相互扶助団体であり、他の堂会とは相違して政治的色彩の濃い三合会の反清の秘密結社組織を採用し、中国系のフリーメソンと自称さへしたとしているが、<sup>32</sup>他の秉公堂 〓 Bin Kung Tong の<sup>33</sup>ごときも同様フリーメソンと自称することく、必ずしも他の

堂会と全然別個の存在であったとはいえないのではなからうか。むしろ、初期には他の堂会と同様財政的企図から反社会的事業も経営し、勢力範囲の角逐のために宗派的斗争としての堂斗をも、繰り返えしていたのではないかと推測される。それが他の堂会とは相違して、マックレオドのいうごとく、政治的色彩を濃くして純然たる政治的団体として変質化してきたのは、前述の一九〇四年孫文の渡米をみてからであったとも解される。

**致公堂の政治団体への改組**―致公堂は他の一般の堂会と同様、洪門系の反清復明の政治的意識を内包するが、民間の豪俠義氣の光棍（無頼漢）により支配される秘密結社組織の会党の範疇に属するものであった。清朝は大清律例、卷二十三の律例「嚴禁異姓結拜弟兄」で、堂会のごとき民間豪俠の徒が、任意に結成する兄弟的仲間組織の設立を禁止していたから、当然非合法的な秘密結社としての「会党」に属していた。反清の洪門系秘密結社であったから、祭神も反清の五祖（少林寺派、誕辰祝日、十月八日）と万雲竜元師（誕辰祝日、旧歴九月九日）であつて、三国志の英雄の関帝は中央神として祭祀されていない。

だが、一九〇三年孫文がハワイ致公堂に加盟し、一九〇四年アメリカへ上陸するとともに、アメリカからカナダにまでおよぶ各主要都市の致公堂勢力は、西部の大佬黄三徳、東部の大哥の司徒美堂等の領導下に、孫文が一九〇二年に創始した「興中会」による国民革命運動に全面的協力の態度を明確にした。

当時、アメリカ華僑七万人余の七―八割は致公堂に加入していたといわれるから、孫文は致公堂に対して大きな期待をかけた。致公堂の総堂は三藩市にあって、各都市に分堂がおかれていた。だが、なお総堂と分堂の連絡は十分でなく、康有為・梁啓超等の保皇会一派の攪乱工作も甚だしかったから、孫文は「洪門総註冊」と「致公堂新章程」の重訂を提議した。ついで、黄三徳とともに各都市の致公堂を歴訪して、致公堂の革命団体としての

改組をはかった。

当時孫文の起稿した致公堂新章重訂要義のうちには、第一に「衆志成城」のスローガンによる洪門系人的集団としての致公堂の組織強化、第二に帝国主義と満人支配から脱却して祖国の光復をはかるべきこと、第三に同胞を残害し、異族に媚びる漢奸の肅清を先にして後、異族支配を排除することを、致公堂の三大義務としてあげている。<sup>89</sup>

ついで、重訂新章程の第一章、綱領においては次の通りに規定されている。<sup>90</sup>

- (1) 本堂は名づけて致公堂總堂といい、金山大埠（サンフランシスコ）に設ける。支堂は各埠に分設する。さきに名目の異なるものあれば、今改正をはかって名づけて致公堂といい、劃一を昭かにする。
- (2) 本堂は鞭撻を駈除し、中華を恢復し、民国を創立し、地権を平均することをもって宗旨とする。
- (3) 本堂は協力して祖国の同志を助成し、宗旨を施行することをもって目的とする。
- (4) およそ国人が立てるところの会党であつて、その宗旨が本堂と相同じくするものは、本堂は益友と認めて、相互提携する。その宗旨が本堂と相反するものは、本堂は公敵とみなして、附和することを得ない。
- (5) およそ各埠の堂友は、一律に註冊の上本堂に報告して、はじめて本堂の一切の権利を享受することができる。
- (6) およそ新進の堂友は洪門香主陳近南の遺訓を遵守し、礼をもって入会儀式を行うべきものとする。
- (7) 現存の堂友は新旧を論ぜず、その才徳衆に出るものがあれば、皆衆の公挙をうけて、本堂の各職にあたることのできる。

(8) 本堂は総理一名、協理一名、管銀一名、核数一名、議員若干名を公挙する。

(9) 本堂は華文書記若干名、西文書記若干名、委員若干名、幹事若干名をおく。以上の各人は皆総理の委任により、悉く

三藩市唐人街の社会構造(六)

### 三藩市唐人街の社会構造 (内)

総理の取締りに服する。

- (10) 本堂は公正判事員三名、公正陪審員二十名をおく、皆総理の委任による。但し、総理の取締りをうけない。
- (11) 総理・協理は四年をもって任期とし、管銀・核数は一年を任期とする。議員は初挙のとき籌籤により、三班とし、第一班は一年を任期とし、満期に補選し、再任をさまたげない。第二班は二年を任期とし、満期に補選する。第三班は三年を任期とし、満期補充する。右により議員中、常に三分の二は事情精通の人としておく。
- (12) 判事員には任期はなく、失職か自発退職でなければ、人をかえない。判事・陪審員は二班に分ち、第一班は一年を任期とし、任期終了の際は総理の人選により補充する。第二班は二年を任期とし、満期の際同様な選補充する。
- (13) 各埠の支堂の総理一名、書記一名、管銀一名、核数一名、値理若干名は、すべて堂友の公挙による。その氏名を総堂に報告して総理の批准により、任につくものとする。もし、その人をえない場合は、総理はこれを取消すことができる。その場合堂友はさらに妥当の人を再挙する。
- (14) 各埠の支堂は適宜に独自の規則を立て堂務を維持することができ、必ず先に総堂に報告して議員の鑑定をうけ、総理の批准により施行すべきものとする。
- (15) 各埠の新任の香主は必ず総堂議員の議決をへ、総理の批准によりはじめて牌を領し、職につくことができる。議員、その他の職員は必ずまず当該新香主の品行端正、指導力を查明して後連保すべきものとする。(以下 略)

右の致公堂の新章程(全八十条)のうちには、洪門総註冊(登記)と総堂と各都市支堂との連携組織が明確化されている。そこには、総理の独裁に近い権力と、自治的内部法廷をおいていることが明らかにされる。

さらに、第二条の宗旨は前述のハワイの中華革命軍の誓詞と、一九〇五年東京で結成の中国革命同盟会(簡稱、中国同盟会)の宗旨とも共通するものであって、倒滿興漢の民族革命と、その内容は不徹底であるが、古代の井田

制度や、太平天国の天朝田畝制度を踏襲するものとみられる「地権平均」のスローガンによる土地改革がとりあげられている。

右のごとき経過により、洪門系の「旧会党」としての致公堂は明確な民族革命団体として脱皮していった。他方、それとともに一八九二年広州で、ついで一八九四年ハワイで成立をみたいわゆる「新会党」としての「興中会」の分会がサンフランシスコにも設置された。スタックトンで「興中会救国籌餉大会」を開き、盛会であったが、清国政府の郷土家族への報復をおそれて、正式に宣誓して入会するものはなお少数で、軍需債券も漸く匿名で応募する程度であった。<sup>33)</sup> 洪門系秘密結社の「旧会党」の組織力の方が当時ではより効果的であった。

孫文は同年大佐黄三徳とともに、各都市の致公堂分堂を歴訪し、ポストンでは司徒美堂から洪門の兄弟として待遇されている。<sup>34)</sup> その後ヨーロッパをへて、翌一九〇五年七月日露戦争直後の日本に向かった。当時日本に亡命していた中国の民族革命派のいわゆる「新会党」には三派があった。孫文一派の「興中会」と長江流域の湖南省に根拠をおく黄興・馬福益・宋教仁一派の「華興会」(洪門系旧会党哥老会||紅帮を基盤とする新会党)、さらに浙江派の章炳麟、蔡元培を理論的指導者とする「光復会」(もと貴州省で成立し、上海に根拠をおく新会党)であり、東京で三派は連合して「中国革命同盟会」(簡稱、中国同盟会)の成立をみ、孫文の民族革命運動は一段階を画した。

同年、時を同じくしてアメリカにおける一九〇二年の排華法に対する反対と、アメリカの合興公司||The American China Development Company からの借款(四、〇〇〇万ドル)による粵漢鐵路建設に対する反対運動が留日学生揚度と、アメリカ留学生達の指導のもとに展開された。一九〇四年彼らによって湘鄂粵三省鉄路連合会が組織され、粵漢鉄路の回収自弁運動となった。ついで、翌一九〇五年の六月から八月末にわたって、広東

### 三藩市唐人街の社会構造 (六)

省から香港、アメリカ華僑社会における会党分子としての商人・工人層の集団勢力結集により、中国で始めての大規模な対外的民族主義運動であり、同時にきわめて効果的であった対米ボイコット運動が展開された。その結果、排華法の撤廃には成功しなかったが、粵路建設権の回収自弁に成功した。その場合に、官府側と結托する商人層とは別に、先の孫文らにより海外華僑社会で育成組織化されてきた「会党」分子に連なる反官派商人層の結束が、漸く大きな影響力をもちだしてきたことが明らかされる。

その後、孫文は一九〇七年「潮州黄崗の起義」に第三次の失敗、その直後「惠州七星湖の起義」に第四次の失敗、同年七月「欽廉の役」に第五次の失敗、同年一〇月「鎮南関の戦い」に第六次の失敗、その直後安南「河内、欽廉の転戦」に第七次の失敗、一九〇八年「河口の占領」に第八次の失敗、一九一〇年「広州新軍の役」に第九次の革命に失敗した。<sup>69</sup> 同年、孫文は日本への入国を阻止されてから、東南アジアの英領・蘭領の各植民地で革命資金の募金に努めたが、皆拒絶された。ここで再び同郷の中山県人のほか広東省人の集居するカナダ・アメリカに赴いて、募金の成功をみ、はるかに本国の革命運動を指揮進行せしめることができた。<sup>68</sup> 血縁・地縁・熟識の人的結合関係が大きく作用していることが判明する。

カナダでは同国の華僑も広東省人を主体とし、各都市の致公堂は積極的に孫文の募金に協力し、七万香港ドルの募金に成功せしめ、香港革命統籌部の黄興や胡漢民等に送金され、軍需に応じることができた。<sup>67</sup> アメリカでは、孫文は中国同盟会分会会員の一律致公堂へ加入せしめることに成功する一方、サンフランシスコの致公総堂に提議して、「洪門籌餉局」を組織せしめて、軍資の募金にあたらしめることとした。洪門籌餉局は対外的には国民救済局と呼称し、弁事処はサンフランシスコ・スポッポード街の致公総堂の三楼におかれ、黄三徳を監督とし、



一九一〇年六月三十六日に正式に成立した。即時、香港の黄興に一万香港ドルが送金された。<sup>83</sup>翌一九一一年三月二十九日黄花崗七十二烈士の殉難後の国内同志からの要請に対しては、一五万米ドルが革命経費として送金された。新会党の「同盟会」と旧会党の「致公堂」の協力の上に、本国における革命運動の援助工作が円滑に推進されていった。

ハワイからアメリカ大陸、キューバにいたる致公堂の組織力が、中華革命の大業達成のため遺憾なく利用されていた。その場合の「募捐章程」における中華革命の宗旨は「韃虜の清朝を廃滅せしめ、中華民国を創立し、民生主義を實行し、わが同胞をして共に自由・平等・博愛の幸福を享けしめる。」(同章程、第一条)ことであるとされている。<sup>84</sup>民生主義の不徹底な内容についてはなお若干の問題があるにしても、総体的にブルジョア革命を意図していることが明らかにされる。

何れにもせよ、サンフランシスコに本拠をおいていた致公堂がハワイからアメリカ各都市、カナダの各都市にわたっての全組織を通じて、孫文の致公堂加入により彼の組織した新会党の「興中会」、ついで「同盟会」を支持し、辛亥革命の成立へとその協力体制が強化されていった。「興中会」は旧会党の致公堂と、「華興会」は哥老会を基盤とし、「光復会」は新会党であるが、哥老会の支派ともいわれ、辛亥革命は新軍を別とすれば、この点洪門革命と名づけられても差支えなかった。洪門系諸会党の企図する反清復明は到達され、清社は倒れ去って、民族革命の成立をみたが、民間の会党勢力は近代的行政官僚というよりは、恣意的な特権的、派閥的官僚層の反対攻勢に当面して、反清以外のブルジョア革命的意図はほとんど何等達成されえなかった。

辛亥革命後の致公堂――明末清初から反清復明を呼号した洪門系諸会党の革命目標は、辛亥革命の成立により一応

### 三藩市唐人街の社会構造造 (六)

達成され、その存在理由は消滅したともいえるが、なお今日にいたるまで、アメリカ各地の致公堂は五祖や万雲竜元師の祭祀を行い、その存続をみている。民国成立後の新しい動きは、アメリカ以外カナダ・キューバ・メキシコ・ジャマイカ・オーストラリア・ニュージーランド・フィリピン・ビルマ・香港等世界の各地に分布する致公堂の領袖達の間にも、本国内にも致公堂組織が組織されるべきであるとの意見が成熟して、各致公堂の募款により、一九二五年三月、上海市海格路（現名、華山路）に「五祖祠」（五祖は蔡德忠・方大洪・馬超慶・胡德帝・李式開の五名、五祖のほかには万雲竜元師と陳近南軍師も併祀されている。）が設けられ、同年九月十二日五祖生誕日に正式に開幕された。太平洋戦争までの致公堂の活動にはみるべきものもなく、虚名を有するに近いものがあり、上海の致公堂五祖祠も戦時中は紅十字会医院に貸出されていた。<sup>40)</sup>

戦時中からアメリカの致公堂、ことに東部の司徒美堂の指導する致公堂の「紐育公報」は反国民党の態度を明らかにしていた。太平洋戦争終結とともに、一九四五年ニューヨークで全米州洪門代表大会が開催され、「致公堂」は「中国洪門致公堂」と改名された。翌一九四六年上海で米洲洪門代表大会が召集され、再度「中国洪門民治党」と改名して、米洲総部はニューヨークにおかれることに議決された。その後、一九五〇年一月カナダのバンクーバーで全米洲第三回代表大会が召集され、総部がバンクーバーに設置されて今日におよんでいる。<sup>41)</sup>

致公堂のスプリットⅡ日中戦争中の国共合作から、戦後国共の対立をみるとともに、致公堂の向背にも微妙なるものが生じ始めた。

ニューヨーク致公堂の領袖の司徒美堂（安良堂創始者、広東省開平県人）は旧会党としての洪門致公堂の政党への改組をリードしていった。彼の目標としたところは、本国における国民党の一党独裁に反対し、毛沢東が終戦

直前に発表した「論連合政府」(一九四五・四・二四)にしたがって、正式政府に参加しうる各民主党派の一組織として、全国人民代表大会へ参加することであった。

前述のごとく、一九四五年ニューヨークで開かれた全米洲洪門代表大会で致公堂は洪門致公党と改称された。翌一九四六年上海で「中国洪門民治党」と改名し、上海にその中央党部がおかれた。世界各地の致公堂の政党化と組織化に尖鋭的に動いたのは司徒美堂であった。中国致公堂の党章をみると、その第一条は次の通りである。「およそ年十六才以上の男女であって、本党主義(民主主義)を信仰し、本党の政綱を受けいれ、本党の規律を遵守し、本党の党章に服従し、本党の義務を尽くすを願ひ、本党の決議を履行し、且つ確かに跨党□□なく、党员二人の紹介と保証があつて、本党の許可をえ、次の入党手続をしたものは、均しく本党の党员となることができらる。」(□印の不明箇所)

入党手続は志願書・党費・入党儀式・主監入署名・党员証書に関するそれである。右には当時の毛沢東の新民主主義論(一九四〇・四・二〇、新綱領として採用)に即応して、民主主義の立場が堅持されている。さらに、党章の第二条には党员の責任について次の通りに明らかにしている。<sup>45</sup>

- (1) 本党の政綱の推行に努力すること
- (2) 党内の政治生活と国内の革命運動に積極的に参加すること
- (3) 本党の政策と決議を確実に実行すること
- (4) 一切の本党を損害し、国家および民族の利益を損害するものに対しては、斗争を進行すること
- (5) 群衆に向かつては党綱と政策を解釈し、もつて党および人民大会との連繫を強固にすること

### 三藩市唐人街の社会構造 (6)

(6) 本党主義を信仰し、忠実に本党の規律を遵守する人士を徵求し、本党黨員たらしめるため力を尽くすこと

右のうちには、過渡期の新民主主義革命と連合政府の段階において、海外の工商関係労働者集団としての致公堂の果たすべき立場と任務が明らかにされている。内部組織は民主集中制（第一〇条）、最高権力機関は全国代表大会（第二六条）、大会で中央執行委員が選出され（第二九条）、中央執行委員会が組織される（第三〇条）等、改組された致公党は中共よりの左傾政党としての骨格を保持していた。

右の改組をリードしたアメリカ華僑の司徒美堂は在米生活七〇年（一八八〇—一九五〇）を通じて、その筆録の「我痛恨美帝—僑美七十年生活回憶録—」（一九五一年、光明日報発行）にも明らかにされる通り、一四才のとき一介の苦力労働者として背中にO・Kとマークされて入国してから、安良堂を創設（一九〇五年設立）、各都市に安良大廈二十座を建設、堂会資本の形成に成功を取めたにもかかわらず、徹底した反国民党と反米主義の信念を固めていった。

一九四九年九月、本国で開かれた「中国人民政治協商會議」に七十年間の在米生活を結束して米洲華僑代表として出席し、中央人民政府委員会委員として選挙され、その後全国人民代表大会常務委員会委員、華僑事務委員会委員、中国銀行監察人等に任ぜられて、一九五五年北京で八十九年の生涯を終った。

彼の改組した中国致公党（主席・陳其尤—広東省海豊県人）は国民党革命委員会（主席、宋慶齡）等とともに北京の各民主党派のうちに参加している。

なお、司徒美堂は一九四六年致公党の組織をマラヤにまで拡大しようとしたが、イギリス政府側が一九世紀末から洪門系会党を非法法団体としてその設立を禁止していたことから、実現をみるにいたらなかった。<sup>44</sup>

何れにもせよ、戦後致公堂の改組をみてから、右翼の国府系と左翼の中共系の両派に内部分裂をひきおこした。サンフランシスコの致公総堂は今日では右翼の立場をとり、五祖や万雲竜元師の生誕祝日には大陸の恢復と打倒中共のため、既往の革命精神の振起することを洪門昆仲に力説することを常としている。

だが、アメリカを離れて、歴年中国本土への小麦の大量輸出と北京への同情的見解をもつカナダにおける広帮系の「洪門民治党」は反国府の立場をとり、北京との国交関係をもつビルマのラングーンの広帮系「洪順総堂」は北京の中国致公党と緊密な連携をもち、マニラの福建帮の「中国洪門連合総会」は国府系であり、インドネシアの客家系の「洪義順公会」（戦時中名、親仁会）は国共二派に分裂して、大哥の章勳義は戦後国府に逃避する等、居住国政府の政治動向により地域差がみられる。

さらに、地域差のほかに、時期差ともいふべき側面もみられる。中共の過渡期の新民主主義革命と連合独裁の時期には中共支持の態度が、つよく、一九五八年八月人民公社を強行し、華僑の郷土の祖廟・家墓を一掃したときには一歩後退し、人民公社政策が一歩後退すれば、一歩前進するごとく、華僑の政治的動向には時期差も検出されうる。

だが、それにもかかわらず、たとえ地域差や時期差があっても、生死同心の人的結合関係に基盤をおく洪門会党が情勢が盛熟すれば、積極的にその組織網を通じてその固有の豪俠義気の「団結は力なり」をもって宗派主義を一擲して立ちあがることは、如上の辛亥革命の場合にも例証される通りである。

以上、堂会の多くが反社会的諸事業を経営する反面、致公堂のごとく政治的にすぐれた役割を果たす場合もあることを明らかにした。ついで、以下三藩市唐人街の経済的側面の検討に問題を転回せしめてゆくこととする。

三藩市唐人街の社会構造 (六)

- (1) 平山周著、「中国秘密社会史」、中華民國二十三年八月国難後第一版、第二二頁
  - (2) Lieutenant-Colonel B. Favre, *Les Sociétés secrètes en Chine, Origine-Rôle historique-Situation actuelle*. Paris, 1933, p. 109.
  - (3) Jaoa Tai-chu, *The Ko Lao Hui in Szechuan, Pacific Affairs*, June, 1947.
  - (4) 平山周著、前掲書、第四五—五三頁
  - (5) 根岸信著、「商事に関する慣行調査報告書—合股の研究—」、東亜研究所、昭和十八年六月十五日發行、第七四—七五頁
  - (6) W. L. Blythe, *The Interplay of Chinese Secret and Political Societies in Malaya*, (*Eastern World*, March and April, 1950), pp. 3—4.
  - (7) 司徒美堂口述、司徒丙鶴筆錄、「我痛恨美帝」、一九五二年、光明日報刊行、第二二頁
  - (8) 清史稿、列伝二百六十一、洪秀全
  - (9) 司徒美堂著、「祖国与華僑」下冊、一九五六年、国外洪門的歴史和他的新情況、第二三三頁  
上海小刀会起義史料匯篇、上海人民出版社、一九五八年、第三一—二二七頁
  - (10) ① 杜鏞著、「中国幫会三百年革命史」十五、「太平天国与洪門之關係」、第九一—九四頁  
② 羅香村著、「羅芳伯所建婆羅州坤甸蘭芳大總制考」、中華民國三十年九月、商務印書館刊行、第二二—二四頁  
③ Dr. T. T. M. de Groot, *Het Kongsiwesen van Borneo*, 'S Gravenhage, 1885.  
④ 民族学研究、第二四卷、第一二号所載、「長岡新治郎論文「西部ボルネオ華僑社会の沿革と変遷」」  
⑤ 海外文庫、「羅芳伯与吳元盛」、名人伝之四、中華民國四十七年六月
- (11) 劉繼宣・東世澂合著、「中華民族拓殖南洋史」、中華民國二十三年、商務印書館刊行、第一四一—一四二頁

馬超俊編、中国洪門海外昆仲懇親大会特刊、中華民國四十五年、第三九頁。

(12) 東洋文化、第七号所載、内田直作論文「華僑資本の前期的性格—マレーの陸佑財閥を中心として—」

(13) 平山周著、前掲書、第一章白蓮会

(14) 杜鏞著、前掲書、第一四二—一四三頁

(15) 孫文著「三民主義」、光華書局、中華民國十六年五月刊行、「民生主義」第二講、第四一頁

(16) 王枢之著、「孫文伝」、第九八頁

(17) 高橋勇治著、「孫文」、東洋思想叢書、第一九頁

(18) 董心琴編、甬光初集、中華民國三十年、「洽老的生平」、第二頁

(19) 陳匡民編著、「美洲華僑通鑑」、中華民國三十九年、檀香山之部、第二六一頁

(20) Robert M. Lee, 'The Chinese in Hawaii, Honolulu, 1961, p.22. 本箇所所載ハワイ華僑人口の推移は次の通り。

ハワイ華僑人口

年度	人口数	総人口に対する 華僑人口の比
1853	364	0.5
1856	700	1.0
1866	1,206	1.9
1872	1,938	3.4
1878	5,916	10.2
1884	17,937	22.2
1890	15,301	17.0
1900	25,762	16.7
1910	21,674	11.3
1920	23,507	9.2
1930	27,179	7.4
1940	28,774	6.8
1950	33,000	6.6
1960	38,797	6.0

(21) 孫文先生選集、中華民國五十四年、第一部、第一篇、孫文先生自伝、第五—十六頁

(22) 孫文先生選集、前掲書、第二部、第一篇、「興中会宣言」、第六三—六五頁

(23) 馬超俊編、前掲書、「国父与洪門」、第四一頁

三藩市唐人街の社会構造(六)

三藩市唐人街の社会構造(内)

- 24 少年中国晨报五十週年紀念專刊、三藩市、中華民國四十九年出版、「国父在美事略」、第三三—三四頁
- 25 馬超俊篇、前掲書、第四二頁
- 26 吳尚鷹著、「美国華僑百年紀実、加拿大附」一九五四年、第一六頁
- 27 Alexander McLeod, *Pigtails and Gold Dust*, Caldwell, 1948, p. 229.
- 28 司徒美堂口述、司徒丙鶴筆録、前掲書、第一頁
- 29 Alexander McLeod, *op. cit.*, pp. 228—229.
- 30 馬超俊篇、前掲書、第四二—四三頁
- 31 馬超俊篇、前掲書、第四三—四四頁
- 32 少年中国晨报、前掲書、論著之部、第七三—七五頁
- 33 司徒美堂口述、司徒丙鶴筆録、前掲書、第一頁
- 34 一橋論叢、第三十二卷、第四号所載、内田直作論文「粵漢鐵路風潮の経過—辛亥革命の一断面—」第四五—五七頁
- 35 霹靂客属公会開幕紀念特刊、「客家」、一九五一年、「客家先賢伝」所載「孫中山」、第四四七—四四九頁、因みに、第一次の革命は一八九五年の広州の役、第二次のそれは一九〇〇年拳匪の乱直後の惠州の役であって、何れも失敗に終つた。
- 36 「客家」、前掲書、第四五〇頁
- 37 馬超俊篇、前掲書、第四六頁
- 38 馬超俊篇、前掲書、第四七—四九頁
- 39 馬超俊篇、前掲書、第四七頁
- 40 平山周著、前掲書、第一七五頁



- (41) 陳匡民編著、前掲書、第六四—六六頁
- (42) 少年中國晨報、前掲書、文、第七四頁
- (43) 中國致公黨黨章、中華民國三十六年五月四日、第三次全國代表大會修正、第一—二頁
- (44) W. L. Blythe, *op. cit.*, pp. 10—11.